

たまのよこやま

※米団子はレプリカ

調査員の研究クート 調査課課長代理 鈴木啓介2

遺跡だより 文京区 原町西遺跡4

都埋文の機器分析 第3回 CTスキャン(3)

“骨の折れる”話～骨格製品の素材同定～5

遺跡発表会 発掘された関東の遺跡 2023 報告6

遺跡事件ファイル File1. 木の実泥棒歴 何千年?8



瘡守稲荷門前の様子

小川頼道 『瘡家示訓』文化7（1810）年
国立国会図書館デジタルアーカイブより引用
<https://dl.ndl.go.jp/pid/2539459/1/6>



調査員の研究ノート

こんな研究しています

当センターの調査研究員が行っているさまざまな研究をやさしく紹介するコーナーです。

#3 調査課課長代理 鈴木啓介



遺物の変化に関する研究

私は今、縄文時代早期前葉の石器の変化に関心があります。石器に限らず、考古学ではモノの変化の順番を考えることが基本です。そのためには、下の層よりも上の層から発見されたものが新しいとする「地層累重の法則」を基にした層位学や、土器の文様や器形、道具の形の変化で新旧を捉える型式学という方法を用います(図1)。例えば層位学で堆積した層の順番から、出土した土器や道具の新旧を位置付け、土器の文様・器形や、道具の形を比較する型式学でその変化の順番を捉えていく、といった方法です。ただこれらの方法論では「土器や道具はなぜ変化するのだろうか」という私の長年の疑問を解くことは出来ません。そしてこれを捉えるヒントは私が以前担当していた広報事業の中にあったのです。

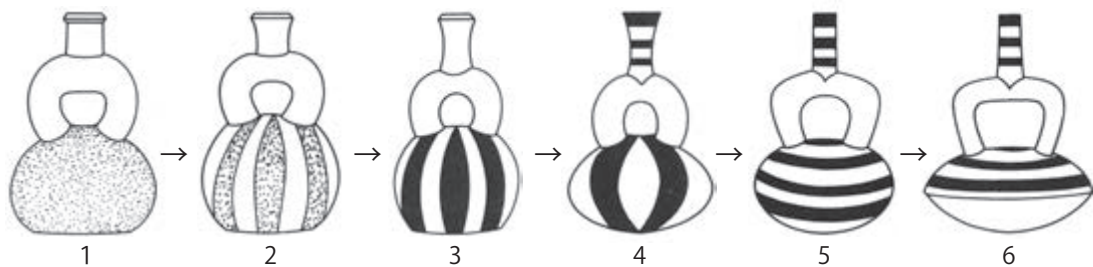
土器づくり教室での気づき

当センターの事業の一つに「土器づくり教室」があります。今から10年前、このイベントを担当することになりましたが、私はその時まで土器を作った経験が無く、私自身が一から土器づくりの練習から始めることになったのです。当センターでは、モデルになる土器を忠実に作ることが基本なので、私も同じように作ろうとしたのですが…これが非常に難しい。モデルの土器は縄文時代中期勝坂式土器で、文様は隆帯があって…という専門的な知識はあっても粘土も私の手も思うように動いてくれず、モデル

の土器と全く違うものが出来てしまいました。しかし次第に慣れてくると、モデルの土器と似たものを作れるようになり、参加者に指導できるまでになりました。そうすると、モデルの土器と一見同じようにできているように見えても、形や文様や施文方法が異なっているという点にも気付くようになります。そして私を含め、ほとんどの人が似たような土器は作れても、全く同じものは作れないということに気づいたのです。モデルの土器を真似して土器づくりを行うと、出来上がった土器はわずかに違うものになり、その土器をモデルにするとまたわずかな違いが生まれて…これを繰り返しているともしかしたら最初のモデルの土器と似て非なる土器に変化するのではないか。つまり土器は、土器づくりを通して変化するのではないだろうか、という気づきが生まれました。また、土器づくりにあまり習熟していない人が指導していたり、あるいは他の地域から違



写真1 土器づくり教室の様子



例えば1が最も古い土器(下層出土)で6が最も新しい土器(上層出土)だとしたら、層位学と型式学(文様と形の変化)により1→2→3→4→5→6の変化の順番が想定される。

(Theory and Practice of Archaeology Thomas C. Patterson 2004 PRENTICE HALL pp13~15 を改変、抜粋)

図1 土器の変化の模式図



写真2 多摩ニュータウンNo.245 遺跡33号住居跡出土のそっくりな土器

う文様や形を持った土器を持って人々がやってきたりすると、その影響で土器が変化することもあったでしょう。つまり土器の変化の要因を掴むことは、土器づくりを巡る社会的な背景の一端を捉えられるのではないかと、今は、私はそう考えています。

この土器づくり教室での気付きから他の道具に目を転じると、実は様々なモノは作る、使うことで変化するのではないだろうか、という視点が芽生えました。現在でも、ある作業用の道具を違う作業に使っているうちに、改良されて新しい道具が生まれたとか、便利さを求めて作られたアイデア商品がヒットした、といった話はテレビやネットで多く見聞します。作業や行為、行動を通して道具の変化が起こったものなのでしょう。土器づくり教室での気付きは、どうやら道具全体に当てはまり、縄文時代も今も道具の変化のメカニズムは、時空を超えて共通しているようです。そしてこういった視点で私の関心事である縄文時代早期前葉の石器に目をやると、今まで気が付かなかった変化や特徴に気付くようになり、私の最近の研究へと繋がります。

最近の研究

土器づくり教室での気付きから始まり、道具の変化の背景への視点を持つようになって、現在は縄文時代早期前葉の石器の変化について考えています。

縄文人の道具を用いた作業、行為・行動が、道具の変化や道具の発生に繋がって、それが当時の人々の活動や社会背景とどのように関連していたのか、これを石器の変化の様相から導き出そうとしているのです。

早期前葉の遺跡から出土する石器の磨石や石皿は植物食料加工具と言われていますが、最初の頃は礫の細い辺を用いてたたくす、特殊磨石という石器(図2-1)と台石状の石器が中心でし

た。その後徐々に磨る面が広がった磨石(図2-4)や石皿(図2-3)が増えてきます。磨面が広いと作業効率が良いと考えられます。そして早期前葉の古い段階、特殊磨石が使われていた頃には見られませんが、磨石が増える時期に刃の部分研磨して作り出す局部磨製石斧(図2-2)が現れます。局部磨製石斧は特殊磨石や磨石の磨る行為が、刃の部分磨く技術へ応用されて生まれたと思われます。局部磨製石斧は木を伐る道具と考えられているため、この時期以降に増加する、穴を掘り、木の柱を用いて作る竪穴住居と関係しそうです。そして竪穴住居跡数と遺跡数の増加とともに、磨石は出土量が増えます。人口も増え、使う人が増えたのでしょう。しかし河原を歩いてみると、磨石にすぐ使える最初から平らで持ちやすい礫は探すのが大変です。そこで長楕円形の礫を短軸で半分に割って、その割れ面を磨面とするスタンプ形石器(図2-5)が現れます。これなら磨石用の礫を探したり、平らな磨面を作る手間が省けます。

このように石器の使用という行為を通じて、特殊磨石は磨石へと改良され、局部磨製石斧やスタンプ形石器などの器種が現れました。これらの石器の増加や登場は、遺跡数や集落数の増加の背景にある人口増加と、これに伴う住居や植物食料加工の需要という、社会背景とも繋がりがありそうです。

今回、この原稿を通じて、住居や集落の変化との関連という課題も浮かび上がりました。どうやら私の研究も、「書く」という行為によって「変化」が生まれたようです。(鈴木 啓介)

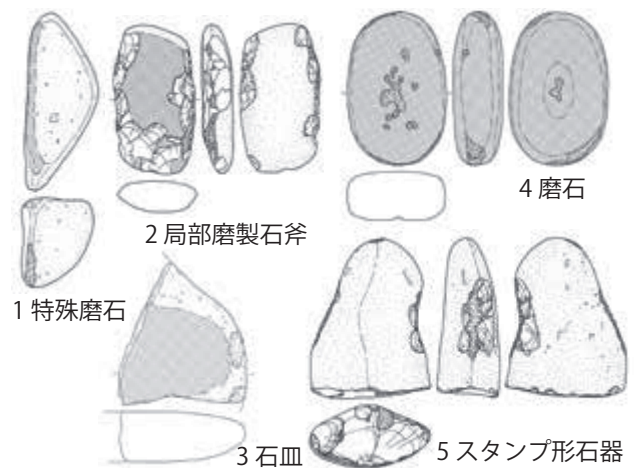


図2 新宿区新宿六丁目遺跡出土石器

(東京都埋蔵文化財センター調査報告第163集 第1分冊より抜粋)

文京区 原町西遺跡

所在地 : 文京区 白山4丁目 10-8
 調査期間 : 2023年5月～2024年3月(予定)
 調査面積 : 1,154㎡

文京区原町西遺跡(No.145)は、文京区の小石川植物園北側に隣接します。5年前に当センターが発掘調査した原町遺跡(日本銀行原町家族寮地点: No.21)のおよそ250m北西に位置します。

1. 小石川御殿の堀

小石川(白山)御殿は、5代将軍徳川綱吉の別邸です。綱吉が藩主であった上野・館林藩の下屋敷が、1680年に綱吉将軍就任と共に幕府の小石川御殿となりました。1698年には「惣囲い」(堀・土塀・石垣・櫓)が構築され、調査区からは堀が検出されています。堀は上端幅18m・底部幅7.5m、深さ5m余りの巨大なもので、御殿の周囲およそ1.8kmを取り囲んでいました(写真1)。1696年に構築された千川上水から水を導き入れた「水堀」です。今回確認された千川上水からの取水口部分には、大きな板石が3枚配置されていました。板石の上には、口縁部と底部が打ち欠かれた「花觚」と呼ばれる花入が横たわっていました。1709年に綱吉が死去すると、1713年に小石川御殿が廃止となり、堀も埋め戻されました。跡地は、整地されて大前家屋敷などの武家屋敷となりました。

2. かわらけと土玉

御殿堀を埋め戻した土から「かわらけ」と「土玉」が大量に出てきました(写真2)。出土した「かわらけ」には、灯明皿として用いられたことを示す煤などの痕跡は認められません。過去に記された文献資料を探索した結果、「かわらけ」と「土玉」が出土した大前家屋敷には「笠森稻荷」があったことが分かりました。

稻荷社は、様々な病気を癒すご利益があるとする社が多いのですが、大阪府高槻市の「笠森稻荷」は「笠」の文字が「瘡蓋」の「瘡」に通じるとして、特に皮膚病の癒しにご利益があるとされています。そのため、江戸時代に各地に勧請され、大前家屋敷にも分祀されました。当時の絵図を見ると、今回の調査地点は1714年にこの「大前 孫兵衛」の敷地であることが確認されています。また別の文書には1797年には谷中に移転したことが記されていますので、実質80年余り当地に「笠森稻荷」が存在したようです。江戸時代の文書に記されたことと絵図に記されたこと、そして発掘調査によって出土した考古資料の3つが見事に符

合した興味深い事例です。

3. 幻の日本実業史博物館

調査区を含む周辺一帯は、1898年から阪谷芳郎の敷地となります。阪谷芳郎は、1906年に第一次西園寺内閣の大蔵大臣、1912年に東京市長、1917年に貴族院議員となり、その他日本ホテル協会会長、専修大学学長など様々な要職を歴任した実業家でした。1941年に死去した後、その敷地は渋沢栄一の義理の息子という関係から、龍門社(現在の渋沢栄一記念財団)に引き継がれて、栄一の孫である渋沢敬三によって日本実業史博物館として開館に向けて準備されますが、戦局の悪化により断念されました。その後の阪谷邸はGHQに接収され、本調査区部分は1950年に最高裁判所官舎敷地となりました。(五十嵐 彰)



写真1 御殿堀完掘状況、板石と花入(左下)



写真2 かわらけ・土玉土坑断面

笠森稻荷では土の団子を供えて瘡瘡の平癒を祈し、治癒した後は米団子を供える習わしがありました。



都埋文の機器分析

当センターの分析機器から得られた調査成果を紹介します！

第3回 CT スキャン (3) “骨の折れる” 話 ～骨格製品の素材同定～

動物の骨や歯牙・角などを利用した出土品は、肉眼では素材の相互識別が難しく、出土量が少ないことも相まって、まだ十分に理解が進んでいません。発掘調査報告書でも「骨製品」と簡単に済まされてしまうことがしばしば。こうした状況を打開すべく、今、CT スキャン（以下 CT）を用いた基礎研究にも取り組み始めています。その一例として、江戸時代、築地にあった尾張藩蔵屋敷おわりはんくらやしきの一角から出土した直径 3cm ほどの円筒形の部材（図 1）について取り上げましょう。



図 1 尾張藩蔵屋敷出土の素材不詳骨格製品

実測図は容器状に描かれていますが、実はこれ、軸物（掛け軸）の軸の両端に取り付ける“軸先”と考えられるものです。問題は、この素材が何かということ。薄いベージュ色で、表面が比較的滑らかという特徴から、象牙や鹿角などが思い浮かぶかもしれませんが、果たして本当にそうでしょうか。

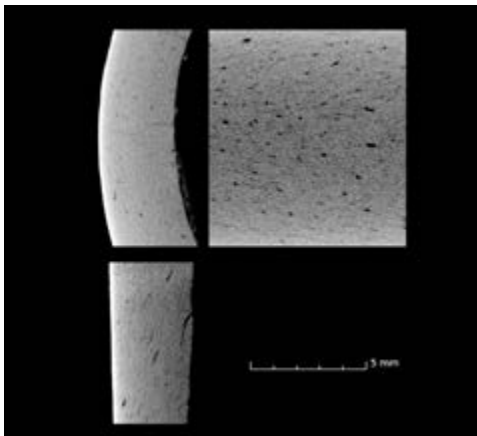


図 2 素材不詳骨格製品の CT 断層画像

図 2 は、円筒部分の CT 断層画像（部分拡大）です。内部には網目のような細長い空洞が無数に認め

られ、水平断面にはかすかに年輪のような同心円状の筋も確認できます。近い構造は象牙にも認められますが、それよりも牛や鹿など哺乳類の長管骨（四

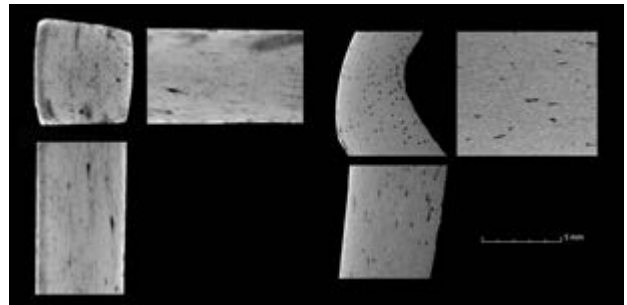


図 3 象牙（左）と牛大腿骨（右）の CT 断層画像
肢を構成する細長い骨）の方がより類似していることが判ってきました。（図 3 右）

さらに資料全体の 3D モデルを作成した結果、内外に貫通する直径 1mm 弱の空洞も一筋見つかりました。そして、これと類似した構造を鹿の大腿骨にも見出すことができたのです（図 4）。つまり、この軸先は適当な太さの長管骨の骨幹（骨の途中）を輪切りにして形を整え、同じ素材から削り出して

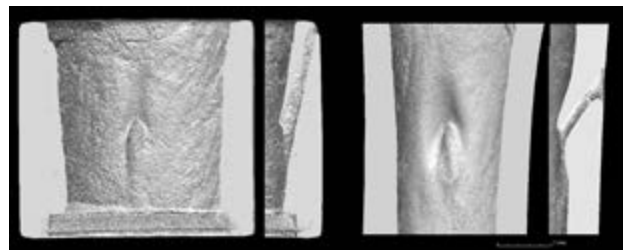


図 4 素材不詳骨格製品（左）と鹿大腿骨（右）の空洞

作った円板をはめ込んだものだったのです。

ただ残念ながら、今回は動物種の特定には至りませんでした。なぜなら、牛・水牛や鹿など、利用された可能性のある動物すべての骨を確認しておく必要があるからです。CTに限らず、機器分析の成否は、比較データの蓄積量に大きく左右されます。とはいえ、こうした分野の素材は入手が困難なものも少なくありません。これから、さらに地道な努力を長く重ねていく必要があるのです。骨だけに“骨の折れる”話です。（長佐古 真也）

遺跡発表会 発掘された関東の遺跡 2023 報告

「全国埋蔵文化財法人連絡協議会」という長い名前(14文字!)の組織があります。調査事業の円滑化の促進と文化財保護の充実を目的として全国の埋蔵文化財関係法人によって構成される組織ですが、その関東ブロックには当センターを含む関東各都・県・市の11法人が所属し、埋蔵文化財の普及啓発活動等を行っています。活動の一つが「発掘された関東の遺跡」遺跡発表会の開催で、近年各法人で発掘した遺跡の中から特に興味深い成果が得られたものを例年ご紹介しています。本年度は2023年10月15日(日)に、埼玉県の桶川駅近くにある「さいたま文学館」で開かれました。その様子を簡単にご紹介したいと思います。

当日朝はあいにくの雨で客足も懸念されましたが、開場時間の10時が近づくにつれ多くのお客様が集まってこられ、考古学に対する関心の高さ・熱心さを伺うことができました。関東ブロック会長でもある群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長の向田忠正氏による開会挨拶のあと、5遺跡について、それぞれの遺跡調査担当者による講演が行われました。

東京都北区 栄町貝塚

トップバッターを努めたのは当センター調査研究員の中島一成で、北区にある栄町貝塚について報告しました。栄町貝塚は縄文時代当時の海岸近くに立地するいわゆる「ハマ貝塚」です。マガキ等を中心とする貝層が厚く堆積しており、その厚さは最大で3.4mにも及びます。遺跡から発見された土器や年代測定の結果から、縄文時代前期後葉から人の活動がはじまり、縄文時代中期に盛んに利用されていたことがわかりました。遺跡では貝の調理加工を行った跡と考えられる焼き火跡が多数見つかった他、出



中島一成 調査研究員

土した数少ない土器の破片の中には土器片錘(網の重り)に加工されているものもあり、漁労活動を行っていたことも窺われました。

群馬県高崎市 下里見天神前遺跡

群馬県埋蔵文化財調査事業団の大西雅弘氏からは、下里見天神前遺跡について発表がありました。この調査では3基の古墳が発見されましたが、報告の主役は3号墳と呼ばれる墳丘直径15m程度の円墳です。墳丘裾部には約30cm間隔で埴輪が並んでいたことがわかりましたが、さらに周溝内約1.4m×約2.3mの範囲からも馬型埴輪・人物埴輪を含む埴輪23点と須恵器2点がまとまって見つかりました。これら周溝内の埴輪の出土状況を見ると、周溝の壁に寄りかかるような形で置かれていた状況が窺え、墳丘の上に置かれていたものが落ちてきたのではないことがわかりました。また、馬形埴輪や人物埴輪の部品の欠損状況からは、埋納されたというわけでもなさそうです。どうやら、別の場所で使う予定で周溝内に一時的に集積したものが、使われずに残置されてしまったと考えるのが合理的とのこと。このように、使う予定の埴輪が集積された状態で見つかることは大変珍しく、極めて興味深い事例です。



栃木県大田原市 上侍塚古墳

とちぎ未来づくり財団の谷中隆氏から報告のあった上侍塚古墳は、いわゆる「水戸の黄門様」徳川(みづか)圀が「助さん」のモデルである佐々木(ささき)宗淳(むねしゆん)らに命じて発掘調査を行ったことで知られる有名な古墳です。2021年から、光圀以来330年ぶりの発掘調査が行われることになり、今回は2022年度の成果について紹介されました。今回の調査では、古墳が

作られた当時の状況だけでなく、江戸時代の光圀の発掘の痕跡も確かめられたのが面白い点です。文献によると、発掘後に古墳に土を盛って修復するよう指示をしたとされますが、今回の調査で修復用の土を掘った跡や、それを盛った跡と考えられる江戸時代の土層が実際に見つかりました。光圀による発掘調査は、那須国造^{なすこくぞう}についての調査という明確な目的を持って行われたという点で、日本最初の学術的発掘調査とも呼ばれます。江戸時代の発掘調査の様子を、現代の発掘調査で明らかにするというなかなか珍しい状況で、興味深い発表でした。



埼玉県行田市 ^{きたおおたけ} 北大竹遺跡

北大竹遺跡は埼玉県の行田市に所在します。令和元年から2年にかけて行われた発掘調査の成果について、埼玉県埋蔵文化財調査事業団の渡邊理伊知氏から発表がありました。本遺跡で注目されるのは、古墳時代後期から飛鳥時代にかけての祭祀関連遺構です。この遺跡からは環頭太刀の柄頭や各種の石製模造品、瑪瑙や碧玉製の勾玉等、多種多様な遺物が見つかりましたが、特に注目されるのは大量に出土した子持勾玉です。子持勾玉は、通常の勾玉の背や腹側に複数の小さな勾玉状突起のつくものですが、本遺跡からは単一の遺跡からの出土としては日本最多となる45点も出土しました。また、高価な耐久消費財である須恵器甕^{かめ}も多量に出土しましたが、この中には関西や東海地方で作られた優品もあり、祭司を執り行った人物の富の大きさが窺い知れます。豊富で貴重な遺物が多数出土した北大竹遺跡は、当時の祭祀の様子を鮮やかに物語る有数の遺跡といえるでしょう。

埼玉県加須市 ^{きさいじょう} 騎西城跡・騎西城武家屋敷跡

発表の最後を飾ったのは、加須市教育委員会の嶋村英之氏による騎西城跡に関する報告です。騎西城は室町時代から江戸初期の城で、戦国時代には古河公方^{こが}と関東管領、上杉氏と後北条氏という二度に渡



る争いの舞台になりました。これまでに80次にわたる発掘調査が行われ、さまざまな遺構・遺物が出土していますが、今回は特に戦に関わるものについての紹介がありました。遺構として特筆すべきは北条氏^{さん}に関わる城にも多く見られる、底に障子の棧のような障害を設けた障子堀という堀です。騎西城の障子堀には最大幅48mと全国最大級のものも見られ、1560年前後の上杉謙信侵攻前後に掘られたものと考えられるそうです。遺物も多様なものが見つかりっていますが、特に注目されるのは障子堀の底で見つかった兜です。兜自体の出土が珍しい上に、シコロ(後頭部の覆い)や吹返し(正面左右の部分)等の残る状態の良さも貴重です。形態から越後系の兜と見られ、上杉方の武将が着用したものと考えられるとのことでした。

朝から降り続いていた雨は用意された5件の発表が終わる頃にはすっかり上がり、晴天が広がりました。心配されていた入場者も、最終的には115名という大勢の方にお越しいただき、主催者一同嬉しく感じました。発表された5つの遺跡いずれもが大変興味深く、関東地域だけでも近年にこれだけの発見がなされていることには、埋蔵文化財の仕事に従事している筆者も、改めて驚かされました。「発掘された関東の遺跡」は来年も開催が予定されています。関東一円の発掘調査の成果を知ることのできる良い機会ですので、ご都合がよろしければぜひご応募ください。(舟木 太郎)



当日配布資料

遺跡事件ファイル

事件は遺跡で、調査現場で、整理作業場で、収蔵庫で、研究室で、起きてるんだ！

File1. 木の实泥棒歴 何千年？

当センターの1F入口階段脇（屋外）には、遺跡庭園で採れた木の实を盛り付けた縄文土器のレプリカを展示しているが、定期的に木の实を補充するはめになっている。知らぬ間に何かが持ち去ってしまうからだ。いったい誰が？夜間に設置した赤外線カメラが犯人の姿を捉えた（写真1）。

犯人はつぶらな瞳のネズミ。昨年来の捜査により、数匹で度々訪れては犯行に及んでいることが判明した。現在は館内に入らないように対策を講じている。

ところで彼らは初犯ではない。日本列島史上、ネズミがこうした事件を繰り返していたことを示す物的証拠は、少なくとも縄文時代まで遡ることができる。

例えば東村山市の下宅部遺跡では、縄文時代のクルミが2万個見つかり、調査対象のうち9割以上は人為的に半分に割られている。しかし中には、写真1の右上に挙げたものと同じように横穴の空いたものが。そう、ネズミの食べ痕である。「あ、やられてるじゃん！」と、縄文人は嘆いたか、笑ったか。

東京都北区にある七社神社裏遺跡の縄文人は怒っていたかもしれない。この遺跡では2つの土坑から野ネズミの遺体が最少でも片や54匹、片や21匹出土している。ほぼ全身の骨が壊れずに残っていたため、食用にされたとは考えにくい。報告者の植月学氏は、これをネズミ駆除の結果ではないかとも指摘している。この遺跡では人々が年間を通して定住していたと推定されており、集落には貯蔵穴があって、ネズミの出土した土坑からは堅果類の破片も見

つかっている（ただし、食痕の有無は不明）。堅果類も貯蔵していたのだとしたら、それを狙うネズミとトラブルが多発していたとしても不思議ではない。

ネズミによる窃盗を、弥生人はさらに重くみていたはずだ。稲作・農耕が発達した上に、改めてハツカネズミやドブネズミといった家ネズミが渡来した可能性があるためである。歴史の教科書などでお馴染みの「ネズミ返し」は、穀物を入れた倉にネズミが入らないようにするための設備と考えられている。また、ネズミ駆除の達人であるネコが日本列島へ連れてこられたのも、この時代と考えられている。

しかしこうした対策に関わらず、ネズミが人家近辺を物色していた疑惑は絶えない。古墳時代、多摩ニュータウンNo.916・917・918遺跡で空き家になったばかりの住居跡の床面から出土した台付甕の上半部には、ネズミの引っ掻き傷やかじり痕のようにも見える無数の傷が（写真2/3月7日まで企画展示に出陳中）。平安時代、多摩ニュータウンNo.442遺跡の貯水施設と考えられる遺構からはネズミの食べたクルミの集積が（写真3）。江戸時代、武家屋敷や町家の敷地内で生ごみを捨てていたようなゴミ穴からはよくネズミの遺体が見つかる。そして歴戦の「木の实泥棒」は、冒頭のように現代も暗躍しているのだ。（宮本 由子）

参考文献

植月学・金子弘昌2002「動物遺体」『七社神社裏貝塚・西ヶ原貝塚Ⅲ・中里貝塚Ⅱ』東京都北区教育委員会
植月学2015「子」『十二支になった動物たちの考古学』新泉社
植月学2021「七社神社裏遺跡第5地点から出土した動物遺体」『七社神社裏遺跡』大成エンジニアリング株式会社 文化財事業部
下宅部遺跡調査団編2006『下宅部遺跡1』東村山市遺跡調査会



写真1 屋外展示の木の实を物色中のネズミ

写真2 ネズミの引っ掻き傷？かじり痕？の残る台付甕（多摩ニュータウンNo.916・917・918遺跡・傷は未報告）

写真3 ネズミが食べた後のクルミ（多摩ニュータウンNo.442遺跡・未報告）

※今号の表紙：文京区原町西遺跡出土の土玉・かわらけ（画面上半）とそれらが出土した土坑断面（画面下半）



たまのよこやま 135
東京都埋蔵文化財センター

2023年12月22日発行

〒206-0033 多摩市落合1-14-2 TEL 042-373-5296 <https://www.tomaibun.jp/>

